つながろう CO·OPアクション情報
2012年7月25日
第19号

「夜のお茶っこ会」陸前高田で開催

男性多数参加で大盛況

「昼間には見かけない方もたくさんいらしていて、本当にうれしかったです」（いわて生協監事・被災地支援担当の飯塚郁子さん）

コープかながわは、6月30日、岩手県の陸前高田市にある2カ所の仮設住宅で、いわて生協の協力のもと、「夜のお茶っこ会」を同時開催しました。コープかながわの職員、組合員理事、活動企画委員の計14人に加え、コープとうきょうの職員2人もスタッフとして参加しました。

プレゼントされた草履を履いて、にっこり。

6月30日、「夜のお茶っこ会」の開始時間（18時）になると、続々と仮設住宅の居住者がやってきました。女性と子ども17人、男性8人の参加で、集会場はいっぱいです。

いわて生協では、震災後、継続して「お茶っこ会」を開催していますが、昼間開催であるため、仕事がある人や男性は参加しづらい環境ともいえます。そこで、男性も来やすいよう、お酒やおつまみなどを出し、夜に開催することになりました。

男性たちはお酒を飲みながら、被災したときの様子や、今後の復興について話し合っていました。

コープかながわの組合員理事の斎藤好江さんは、「皆さんが、本音で語り合う様子が印象的でした。こうした場をつくることがまずは大切だと感じました」と話します。

また、同生協の組合員理事である小石淑子さんは、布草履を居住者にプレゼント。被災された方の健康を願う気持ちや、布草履づくりを通した地域活性化への期待が込められた贈り物となりました。

震災から１年４カ月経った陸前高田市を見てまわる参加者。

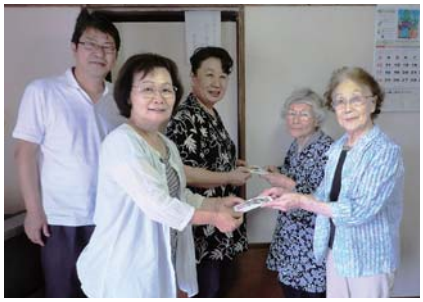
四国４生協がお菓子をきっかけにサロンで交流

いわて生協が被災地で開催する「ふれあいサロン」に、四国の4生協が月に1回、地元の銘菓をお茶菓子として提供することになりました。7月10、11日は、4生協から代表のメンバーがいわて生協の「ふれあいサロン」を訪問。参加した方々へ直接お菓子をお渡ししました。

夏草に覆われた線路跡、がれきの山に言葉なく

四国の４生協（コープえひめ、こうち生協、とくしま生協、コープかがわ）は、いわて生協が被災地で開催する「ふれあいサロン」に、５月より月に１回、地元の銘菓をお茶菓子として提供しています。そのつながりで、四国４生協のメンバーが、７月10、11日、いわて生協の「ふれあいサロン」を訪問しました。

訪問したのは職員・組合員理事ら10人。陸前高田に着いた一行は、いわて生協監事・被災地支援担当の飯塚郁子さんに案内されて、津波で壊滅したまちの状況を見てまわりました。夏草に覆われた大船渡線の線路跡、川の途中で消えている陸橋、えぐられた護岸、波の力で剥がれたアスファルト。「河口から４キロも離れたところまで津波は来ました。このあたりにはずっと建物が立ち並んでいました」。飯塚さんの説明に全員、言葉がありません。当日は震災から１年４カ月目の11日。道路沿いには行方不明者の捜索をする警察の姿もありました。



絵手紙を仮設住宅からの方からプレゼントされる。

「ありがたい」との涙に心打たれて

午後、一行を乗せたバスは、「ふれあいサロン」が開催される市内４カ所の仮設住宅集会所に向かいました。

こうち生協の３人がサロン会場の中田雇用促進住宅でバスを降りると、ちょうど住民の方々が集まり始めていました。「あら、まだ早い？」「いいよ、いいよ、あがってください」。皆さん、サンダル履きで気軽に集まってきます。

いわて生協ボランティアチームリーダーの長牛和子さんから「今日は四国の生協の皆さんが来てくださっています」と紹介を受け、さっそく住民の方へお菓子を贈呈しました。お菓子に添えられた４生協の組合員のメッセージをこうち生協の扇谷京子さんが読み上げると、「ありがたいねー」と涙を見せる住民の方も。扇谷さんももらい泣きし、じんとくる心の通い合いでサロンが始まりました。

心のこもった絵手紙をいただきました

この日はサロンで、「絵手紙づくり」を行ないました。作業が終わりに近づいた頃、住民の方から「私たちは助けられてばかりなんで、お礼を言いたい」という声が上がりました。２枚作成したハガキのうち１枚を、四国の生協の組合員に贈りたいと言うのです。それぞれ「お菓子をありがとうございました」「気を付けてお帰りください」などのメッセージを書いたハガキを渡してくれました。

サロンは、笑い声が絶えず、住民の方は「こうやって笑うっていいねー。家の中にいるとこんなに大声で笑うことないもんね」と話していました。「遠いところからお土産を持ってきてくださった。もうそれだけで嬉しいんですよ」といわて生協のボランティアさん。お菓子を介した心の交流はこれからも続きます。

応援し続けたい という思いを胸に

鳥取県生協は、6月4日、みやぎ生協の岩沼店で行なわれたボランティア交流会を訪問し、「ふれあい喫茶」で使っていただく鳥取県のお菓子やメッセージをみやぎ生協仙南ボランティアセンターの方々に渡しました。

ボランティア活動に関わっている皆さんに、贈呈しました。

鳥取県生協は、震災直後から募金、被災地への人員派遣などを行なってきました。その中で、組合員が中心となり、「とっとりふれあい便プロジェクト」を立ち上げ、みやぎ生協の仙南ボランティアセンターにお菓子を贈る取り組みを今年６月より始めています。

このプロジェクトは、３月に行なわれた「つながろう CO・OP アクション交流会」（主催：日本生協連）にて、みやぎ生協組合員理事と交流したことがきっかけで立ち上がったものです。「銘菓などは会話のきっかけになる。ちょっとした心遣いがうれしい」という話から、お菓子を贈ることに決めました。鳥取県生協は、東・中・西各エリア会で構成されており、３エリア持ち回りで、それぞれの銘菓を贈る予定です。

６月４日には、みやぎ生協の岩沼店で開催された、ボランティア交流会の参加者に、目録、メッセージなどを渡しました。組合員活動推進グループの中田輝樹さんは、「この活動が被災された方の力に少しでもなれば」と話していました。

旭市の仮設住宅でふれあいの場づくりをしよう

東日本大震災により発生した津波で大きな被害を被った千葉県旭市。ちばコープは、今もなお仮設住宅での生活を続ける被災者の皆さんに向けたさまざまな支援活動を行なっています。ちばコープ被災者支援の取り組みについて紹介します。

「うちの中にいると、しょんぼりしちゃって。
こういう機会は貴重」と話す参加者。

旭市は、東日本大震災で発生した津波により、死者 13 人、行方不明者２人、全壊 336 世帯、大規模半壊 432 世帯という大きな被害に見舞われました。現在も、多くの方が仮設住宅で生活をおくっています。

ちばコープは、震災発生直後から、東北の生協・被災地を支援する一方で、県内の被災地についても支援活動を行なってきました。お見舞金や飲料水のお届け、旭市特産の花を使用したフラワー・アレンジメント教室など多くの方に喜ばれました。

昨年８月には、千葉県から生活支援アドバイザーも派遣されました。孤独死を防ぐための「ふれあいの場づくり」に重点を置くことが決まり、職員ボランティアによる「炊き出し」、お茶会「スマイルカフェ」などに力を入れてきました。

「スマイルカフェ」参加者の一人は、「うちにいたら、もう、しょんぼりしているだけだから、本当にありがたくて」と感想を述べていました。現在は、組合員グループや地域団体の支援企画も入り、活動の輪がさらに広がっています。

どんなに時間がかかっても元気な宮城をつくろう！

総会の会場には、約 240 人が集まりました。

7月7日、「第2回　食のみやぎ復興ネットワーク総会」が宮城県仙台市で開催され、会に参加している194団体から農・水・畜産業の事業者や製造加工業者、みやぎ生協の組合員ら約240人が集まりました。

食のみやぎ復興ネットワークは、「喪失した生産基盤の復活・再生」、「みやぎの新しい特産品づくり」、「みやぎの食材を活用した商品づくり・みやぎの食産業を励ます商品づくり」を目標に掲げ、さまざまなプロジェクトの立ち上げや、一次・二次産業者の連携を活かした加工品開発などに取り組んできました（詳細は、本誌 16 号参照）。

７月７日に行なわれた総会では、「2012 年度の活動」として、「地域復興のための商品づくり、商品普及の取り組みをさらに進める」、「ネットワーク参加団体の活動の“見える化”を進める」、「『買い支える活動』の拡大を進める」の３項目が提示されました。

東北国分（株）代表取締役社長の降幡進さんから、「どんなに時間がかかろうとも、本日お集まりの方々が心をひとつに、元気な宮城、元気な一次産業をつくるんだという強い思いを結集していくことが、復興に向けての大きな力になると思っています」とあいさつがありました。

◆「農家として本当に感謝しています」～村田の秘伝豆プロジェクト

「村田の秘伝豆プロジェクト」は、食のみやぎ復興ネットワークが進めるプロジェクトのひとつで、「地域農業の活性化」「休耕圃場の復活」「後継者が安心して農業に取り組めるための経済的支援」を目指して、2011 年から取り組みが始まりました。秘伝豆とは、東北地方に伝わる青豆です。現在、生産者の集まりである「村田出荷組合」の 10 軒の農家と食品メーカー、市場関係者、みやぎ生協が一緒になってプロジェクトを進めています。５月 19 日、快晴の空のもと、柴田郡村田町菅生の畑で「秘伝豆」の種まきが行なわれました。

９月の収穫を思い描きながら種を植える参加者。

秘伝豆の種を２粒ずつまいていく。種は、鳥対策の為に赤い。

種のまき方を指導してくれた高橋 保さんは、「生協さんと、もっと早くこういう取り組みができていたら、農業に対する意識も変わっていたと思う。そういう意味で、今回の取り組みは農家として本当に感謝しているという声が、この間の会合で会員から出たんだ」と顔をほころばせます。

仙台市場の松印松浦青果の大宮賢治さんも、「最近、秘伝豆をつくる若い人が増えました。それが光です」と手応えを感じています。秘伝豆プロジェクトで生産農家の状況は確実に変わりつつあります。

（日本生協連復興支援ポータルサイトより）

生産者の思いに耳を傾ける参加者。

青々と葉が茂る桃畑。

福島・桃生産者の努力と思い、私たちが伝えていく

東海コープ事業連合（以下、東海コープ）では、今年の夏、福島県産の桃を、宅配（共同購入）や店舗で取り扱うことに決めました。プロモーション用のレポートを作成するため、6月19日、東海コープの組合員3人が福島の桃生産者を訪問しました。

福島の生産者の現状を伝えるため、訪問

今年の夏、福島の桃を供給する東海コープ。桃の取り扱いについて、3月から打ち合わせや学習会を行なってきました。そして、6月19日、コープあいち、コープぎふ、コープみえの組合員計3人が、JA伊達みらい職員や生産者のもとを訪れました。桃のプロモーション企画のひとつとして、生産者たちへインタビューを行ない、それらを機関紙等に掲載するレポートにまとめるためです。

組合員たちは、JA伊達みらい管内の生産者の放射線への対策をまとめた映像を見たり、生産者の畑を見学したりしました。コープぎふの組合員である山村まさこさんは、「この地域には、祖先から受け継いだ90年間の桃の生産技術の継承があるそうです。それが放射線の問題で止まってしまうことを、なんとしてでも阻止しようという、生産者の皆さんの思いと努力に心打たれました」と語ります。

福島の農業の取り組みについて、説明を受ける参加者。

知らないことが多いことに気付きました

映像の中では、果樹の中で放射線を含むのは、葉っぱや樹皮が主な部分ということや、根からの放射線の吸収は少ないことなどが紹介されています。

葉は冬に落ちるため、樹皮の放射線量を下げれば、果実への放射線量を減らすことができると考えた生産者は、枝につららができる極寒の時期、果樹を一本一本高圧洗浄したり、粗皮削りをしたりという作業を行なってきました。高圧洗浄を行なった果樹の放射線量は、46～71％低減し、粗皮削りを同時に行なったものは62～79％の放射線量の低減につながりました。

今年の桃は、ほとんどが20ベクレル以下、もしくは限りなく0に近い数字が予測されます。コープあいちの組合員である加藤恵子さんからは、「ここに来るまで、放射線の知識もなかったし、除染のやり方も直接水で桃の実を洗うのだと誤解していました。実際に食品を購入する方に向けて、放射線について理解できるツールを制作してみたらどうでしょうか」とアイデアが出されていました。

今年が正念場

その後、生産者の斎藤栄慶さんの桃畑を訪れ、交流しました。昨年、この地域で作られた桃に含まれる放射線量は、国が定めた100ベクレルという基準値（当時）を下回っていましたが、市場での取引価格は従来の半値でした。今年も同じ値段がつけば、多くの生産者が、農業を断念する恐れがあります。コープみえの組合員である吉冨あゆみさんは、「生産者の努力を多くの人に伝え、安心を広げていければと思います」と力強く話していました。

東海コープは7月下旬に再び福島を訪れ、桃の出荷の最終確認をし、8月に宅配・店舗で供給していきます。

※コープぎふ、コープあいち、コープみえの東海3県3生協からなる連合会。

被災地とつながり続けるために

7月12日、全国の震災支援ボランティア担当者が集まる「第1回　震災支援ボランティア活動担当者交流会」がコラッセ福島（福島市）にて開催され、それぞれの思い、アイデア、課題を共有しました。

それぞれの生協の担当者が、思いを伝え合う場となった。

集まったのは、全国の生協の震災支援ボランティア担当者など45人。

第1部では、現在のボランティアの現状報告や、被災3生協から、震災復興の進捗状況についての具体的な報告がありました。

第2部では、3グループに分かれ、それぞれの生協の活動内容や課題を出し合いました。あるグループでは、「被災された方との交流の場のスタッフは、同じメンバーが継続的に参加したほうがよいと聞くが、費用や時間の面で難しい。どうしたらよいか？」という問い掛けに、被災地生協から、「同じ人でなくてもよい。遠くからわざわざ来てくださることがうれしい」という意見があったり、「皆がよく知るコープ商品が交流の場にあると、共通の話題になってよいのではないか」という意見が出たりしました。また、「避難されてきた方が本音で話せる場所がない」といった課題も共有されました。「皆、同じような悩みを抱えていることが分かり、今後具体的にどのような取り組みをしていくか考えるヒントになりました」といった感想が参加者から出されるなど、実り多い交流会となりました。

復興進まぬ南相馬市 求められるボランティア

4月16日に警戒区域が解除された福島県南相馬市小高区で、日本生協連ボランティア隊の活動が行なわれました。被害を受けたまま放置された家屋。ボランティアの力がまだまだ必要です。

津波の被害を受けた家の中を片付けるボランティア。

今年4月に警戒区域が解除された福島県南相馬市小高区。5月11日の毎日新聞朝刊に「力仕事助けて　がれき撤去　ボランティア不足」のタイトルで記事が掲載されたことを受け、日本生協連ボランティア隊「笑顔とどけ隊」は6月16、17日に、南相馬市にボランティアに赴きました。

現地は、あちらこちらに車が転がり、家は今にも朽ち果て崩れそうな姿になっており、3月11日の地震・津波の被害を受けたままの姿がそこにありました。水も電気も通っておらず、住民の宿泊も許されていません。

ボランティア隊は、現地ボランティアセンターからの依頼を受け、家屋の床下の泥かきや、めちゃくちゃになった家財を片付ける作業などを行ないました。

現地の方は、「原発事故で避難した後、何を訴えても誰も聞いてくれない。復興が進んでいるように報道されていますが、私たちは国が何とかしてくれるのを待つしかありませんでした。復興が進まないこの町の状況をもっと多くの人に知ってほしい」と話していました。

今年も実施「福島の旬を味わおう！贈ろう」キャンペーン

昨年も好評だった企画が、今年も登場！
11年夏には、「福島応援隊・福島の桃を贈ろう！」キャンペーンを展開し、全国38都道府県の企業・団体・個人に1,257ケースを販売。11月には第2弾として「同・福島のりんごを贈ろう！」に取り組みました。

福島県内のJA・漁協・森林組合・生協で組織する「地産地消ふくしまネット」では、2011年度から「福島応援隊」の取り組みを行なっています。これは福島県産の果物を食べ、贈ることで生産者を応援していくものです。

7月9日、「福島応援隊2012・福島の旬を味わおう！贈ろう」キャンペーンの一環で、「地産地消ふくしまネット」のメンバーが上京し、日本生協連への訪問もありました。

このキャンペーンでは、7月31日まで、桃の注文を受け付けています。「地産地消ふくしまネット」で検索。
URL：http://www.fukushima.coop/fukunet/

「学校図書館げんきプロジェクト」へ募金贈呈

日本生協連では、「学校図書館げんきプロジェクト」（活字文化推進会議、全国学校図書館協議会、文字・活字文化推進機構）を支援するため、「つながろうCO・OPアクションくらし応援募金」を全国の生協に呼び掛けてきました。7月14日には、岩手県盛岡市で「学校図書館げんきファーラム@岩手」が開催され、日本生協連・ちばコープ理事の小倉寿子さんから、大槌町立大槌北小学校教諭の菊地富士子さんに目録が手渡されました。被災地の図書館復興のために使われます。

募金は、2013年2月末まで継続して呼び掛ける予定です。

小倉理事（写真左）が、募金の目録を贈呈。
写真：読売新聞社提供

「伝えたい被災地」

このコーナーでは、ライター荒川和巳さんが被災地に入り、見たもの、感じたものを、お伝えしていきます。

生協さんの取材で、継続的に被災地に行っている。

暑いのか寒いのか分からない微妙な天気が続いていたある日、ブログで「明日の被災地取材に何を着ていこうか」と書いて、友人の返事に目を疑った。

「防護服を着るしかないでしょう。お気を付けて」

絶句。すぐに謝罪と訂正を求めることも考えたが、やめた。キレたところで問題は解決しないからだ。書き込んだ人は悪気などなく、私の被ばくを本気で心配している。

被災地のボランティアセンターにて。
※写真と本文は関係ありません。

インターネットも活字も電波も常に情報を発信しているのに、なぜこんなことになるのだろう。被災者の皆さんの気持ちが置き去りにされている。

これからどうするか。すぐに答えが出てこないが、自分ができることを模索していくしかない。根気よく取材を続けて行くこと、今はこれしかないのだ。これからも被災地の皆さんの声を聞いて、つながっていこう。そう思った。

【九州北部豪雨に対する生協の取り組み】

この度発生した九州北部豪雨では、大分県、熊本県、福岡県を中心に大きな被害をもたらし、これまでに被害を受けた住宅は約 11,202 棟、死者・行方不明者は合計 32 人となっています（7 月 20 日現在、消防庁調べ）。熊本県内の生協では、組合員や職員のご家族が亡くなられました。また、複数県の生協の事業所で雨漏りや浸水被害を受けました。

各生協は、組合員の安否確認や自宅訪問などを行なっています。日田市民生協では日田市の要請を受け、物資の提供を行ないました。また、コープおおいたでは、県社協からの要請を受け、ボランティアセンターにコープ商品を無償で提供しました。

日本生協連では、募金口座を開設し、全国の会員生協に募金の呼び掛けを行なっています。

ボランティアセンターに物資を届ける
コープおおいたの職員。

大分県竹田市の被災状況。

支援募集情報

○いわて生協：

・被災地ツアー（観光を含んでも可能）、被災地ボランティアツアーの企画・実施

・被災地のお母さんたちや福祉作業所などの復興応援商品の販売協力（宅配以外のイベント等での取り扱い協力など）

・被災メーカーの商品や復興応援ギフトなどの店舗・宅配での販売協力

・中小仮設住宅の支援

新着 ・移動店舗購入金の支援（1 台→ 6 台に増設するため）

連絡先は、いわて生協組織本部・小野寺 真さん（019-603-8299　月～土　9:00 ～ 18:00）まで。

○みやぎ生協：

・「みやぎの子どもたち生きる力（思い出づくり）支援」プロジェクト実施のため、募金をお願いいたします。被災し、心理的ストレスを受けた子どもたちが「生きる力」をつけるため、さまざまな方のお話を聞いたり、体験したりするツアーを組み、子どもたちの未来に夢と希望を与えます。実施には 3,000 万円の費用が必要です。ぜひ、できる範囲で募金にご協力ください。問い合わせは、みやぎ生協専務理事スタッフ・五十嵐桂樹さん（022-771-1590）まで。

・ふれあい喫茶で使用する、お菓子（各地の名産品など）を募集しています。連絡先は、みやぎ生協ボランティアセンター（022-218-3880）まで。

○食のみやぎ復興ネットワーク：「宮城県漁協志津川支所」に漁船・船外機・フォークリフト・わかめ収穫用コンテナを、「JA いしのまき」に 海水淡水化装置を贈るため、上記物品、あるいは、支援金を募集。連絡先は、みやぎ生協 藤田 孝さん（022-772-6141）まで。

○福島県生協連：「福島の子ども保養プロジェクト」の①スタッフ、② 大型連休の保養受け入れ先募集。①は、1 カ月単位で毎週末参加可能な方を。②のご提案は、企画（日程、募集対象者、募集人数、スケジュール、参加者負担額等）を明確にした上で、ご連絡ください。連絡先は、福島県生協連 根本 喜代江さん（024-522-5334）まで。

（保養の企画、運営、費用は、主催者にご負担いただきます。ご了承ください。）

本号外部取材スタッフ：荒川和巳、野口武、早坂恵美、山田省蔵

つながろう CO·OPアクション情報（次回 8 月 29 日発行予定）
発行 日本生活協同組合連合会(会員支援本部出版部)
〒 150-8913 東京都渋谷区渋谷3 ― 29 ― 8 コーププラザ11F Tel:03-5778-8183/ Fax:03-5778-8051 action@coop-book.jp

2012 国際協同組合年